仙石原すすき草原

仙石原の広大な平原は、背の高いすすきの草（薄、Miscanthus sinensis）で覆われています。夏は深い緑の草は、9月からつややかな薄紫色の種子の冠毛を伸ばし、秋の中頃には銀色の茂みに変わります。平原を通る小道は丘の上へと通じ、先に進めば進むほど、近くの山々や周辺の湿地をより見渡せるようになります。以前は湖底だったこの草原は、樹木やその他の侵入植物が広がり、草の成長を抑制するのを防ぐために、野焼きをして定期的に維持管理されています。ススキの草が家屋の屋根を葺くために使われていた江戸時代（1603–1867）初期には、このような管理方法は非常に実用的な目的を有していました。建築資材の近代化により、草の需要が減ると草原は数十年の間、弱ってしまいました。1989年に試験的に保全活動が再開されました。2000年以降、ススキは毎年刈り取られ、野焼きが行われ、ここを訪れる人々は、日本の生活や文化において長く重要な役割を果たしてきたこの植物の他とは違う美しさ(青々とした草原)を確実に楽しめるようになっています。